

自覚と無

—西田幾多郎の絶対無の自覚をめぐる—

氣多雅子

哲学の領域で「無」というテーマが掲げられるとき、西田幾多郎の「絶対無の自覚」という思想を抜きにして議論することはできないであろう。西田の考え方は、無をめぐるさまざまな思索のなかの重要な一角を占めているからである。西田の無の捉え方は、ヨーロッパの思想伝統のもとではキリスト教神秘主義を始めとする宗教思想と親近性があるとしばしば語られる。それと関連しつつ、西田の無の思惟はハイデガーの存在の思惟の根柢に潜むものとも深く通底していると言ってよいであろう。西田の無の思惟は「自覚」ということと切り離せない。「絶対無の自覚」とは何かということ、まず西田の叙述に即して明らかにしてみたい。

「自覚」という概念は西田の思想展開のなかで一貫して重要な役割を果たしているが、それが彼の独自の思想としてはっきりと形を取っていくのは中期においてである。自覚が所謂自己意識と異なるのは、自己が自己を見るということの無限の過程の行き先が自己自身の内だという点である。その内へと向かう過程が自覚の深まりゆく過程として明確に構造的に捉えられるようになるのは、西田が「自己が自己自身を限定する」という考え方を打ち出すことによってである。この考え方を理解するには、まず「一般者が自己自身を限定する」という考え方を理解する必要がある。

一般者の自己限定という考え方は、判断的知識を出発点として、いわば知識と呼ばれるものの枠組みそのものを拡張してゆくことによって、通常の概念的知識では捉えられないものをも知識として捉え、その拡張を通して、真の意味での「知るもの」を問い求めるなかで成立すると言ってよいであろう。その拡張は、アリストテレスに由来する「個物」を手掛かりとしてなされ、述語的論理の立場として結晶する。西田は通常的一般概念を越えたものを包む述語的なものを「一般者」と呼び、主語とならない超越的述語面こそ真の一般者であると見なす。そして、自覚的意識はこの超越的述語面の自己限定としてのみ考えることができるとする。述語的論理とは自覚の論理にほかならない。

「一般者が自己自身を限定する」ということは、「自己が自己自身を限定する」という自覚的構造をもち、その場合の限定は「無にして有を限定する」という「自覚的限定」として特徴付けられる。

「無にして有を限定する」とはどういうことか。それは、自覚ということをして自覚そのものの立場から考察することによってはっきりと見えてくる。自覚そのものの立場からの考察は、それまでの考察から視点を移動させることになる。そうすると自覚とは、「自己が自己に於て自己を見る」ということになる。この言い方で重要なのは「自己に於て」ということである。「自己に於て」は意識面を指すことになるが、それは表象的意識面ではなく自覚的意識面である。自覚的意識面に於てあるものが自覚的自己である。表象的意識面においては「自己に於て」は隠れているが、自覚的意識面においては「自己が」も「自己を」も「自己に於て」に収斂していると言ってよいであろう。

だが我々の自覚はそこで止まるわけではない。西田によれば、自覚的自己は知的な自己であるかぎり、自覚的意識面といっても表象的意識面との境界に於てあるのであって、真に自覚的意識面に於いてあるのは意志的自己である。そして、意志的自己よりいっそう深い自己が行為的自己であるとされる。だが行為的自己もなお意識面に於てあるものであるが、意識せられた自己をまったく脱却したのが「絶対無の自覚」である。

絶対無の自覚という思想がおかれている文脈は、知識論であるとともに自己論でもある。ここで論じられる無の思惟がどのような特質をもち、どのような問題を孕んでいるかということ、考察してみたい。